様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　23 日現在

機関番号：14301
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2011
課題番号：22653054
研究課題名（和文）　科学社会学と学説史研究の統合による社会学の課題発見の研究

研究課題名（英文）　Exploratory Research through Integration between sociology of science and history of sociology

研究代表者
太郎丸 博　（TAROHMARU HIROSHI）
京都大学 文学研究科 准教授
研究者番号： 60273570

研究成果の概要（和文）：
日本社会学会の下位分野間ネットワークの分析と、学会誌にあらわれる日本社会学の方法論の趨勢について分析した。日本社会学会は、その規模が拡大し専門分化が拡大しているといわれる。しかし、2006 年の日本社会学会の名簿をデータとして、下位分野間の研究者の重なり具合を分析した結果、各分野は緩やかに繋がっており、複数の異なるグループに分かれているわけではないことが分かった。また、方法論の趨勢に関しては、1990 年代の後半から質的な研究が顕著に増加し、学説史・理論研究が減少していることが分かった。

研究成果の概要（英文）：
We studied on network between subspecialties and the trend of methodology in Japanese sociology. It is said that the population of Japanese sociologists has increased and the division of labor among the sociologists has been extended. Our research, however, showed that the subspecialties are weakly related to each other, through analyses of directory for Japan Sociological Society. On the other hand, the results of our analyses showed that qualitative sociology increased and history of sociology / theoretical sociology decreased around 1990.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600000	0	600000
2011 年度	500000	150000	650000
年度			
年度			
年度			
総　計	1100000	150000	1250000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：社会学史、科学計量学、知識社会学、ネットワーク分析

１．研究開始当初の背景

日本の社会学は、欧米の社会学を輸入し、それを欧米と日本の両方の文脈に照らしながら理解することで、欧米の社会学の理論や方法を自家薬籠中のものとしてきた。すなわち、日本の社会学は元来キャッチアップ型の学問であった。そのため、学説研究が、日本社会学においては中心的な重要性を持ち続けてきた。しかしながら日本に社会学が輸入されて以来、すでに 100 年以上がたち、日本の社会は理論、方法ともに欧米の社会学に比べてそん色のないレベルに到達しつつある。そ

れゆえ、近年では日本の社会学も、高い水準の研究成果を諸外国に向けて情報発信することが求められているし、欧米の研究を日本に輸入するだけでなく、最先端の理論や方法論を日本の社会学が切り開く必要のある時代になってきた。

このような状況下では、日本の社会学者も、各自の細かな専門分野の研究だけでなく、社会学全体を見わたし、これまでの成果を総括したうえで、社会学が今後進むべき道を真剣に考えていく必要がある。このような役割は、日本ではこれまで学説研究によって担われてきた。社会学の歴史と全体を俯瞰するのに、学説の研究者ほど適任な者はいなかったのである。しかしながら、社会学の規模の拡大と専門分化、レベル・アップに伴い、一人の学説史研究者が社会学全体を俯瞰することはほとんど不可能になりつつある。

２．研究の目的

社会学者が社会学の全体について適切に理解することは、困難かつ重要な課題となってきている。ルーマン風にいえば、社会学の自己観察をいかに成し遂げるかが重要な課題なのである。もちろん学説研究は依然として重要な方法であるが、私たちの研究では科学社会学の方法を応用して、日本社会学の特徴を明らかにすることを試みる。具体的には、日本社会学における下位分野間ネットワークの構造を明らかにすることと、日本の社会学で用いられる方法のトレンドの分析を行う。前者は、どの程度研究者間の棲み分けが行われているのか、あるいは日本の社会学に中心的といえるような分野があるとすればどのような分野かを明らかにすることを目的としている。後者は方法という観点から、日本の社会学の特徴とその変遷を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、日本の社会学の下位分野間ネットワークの分析と雑誌論文で用いられた方法の分析を行っているので、それぞれの方法について述べる。

3.1 下位分野間ネットワークの分析

2006 年の日本社会学会の名簿に記載されている会員のうち半分を以下の要領で系統抽出した。この名簿は氏名の昇順で会員を記載しているが、この名簿の 4 の倍数のページで始まる見開きに記載されている会員をすべてサンプリングした。すなわち、4, 5 ページ、8, 9 ページ、12, 13 ページ. . . に記載の会員をサンプリングした。会員の性別とエスニシティは、名前から推測した。ウェッブページなどから性別やエスニシティについて情報が得られる場合は参考にした。専門分野は 32 に分類されており、会員は入会時にこのうちから 3 つまで自分の専門分野を選ぶことができる（その後も随時変更できる）。このデータに関して、クルチンスキの類似性指標をすべての専門間で計算した。この類似性行列をもとに、階層的クラスター分析（平均法）、多次元尺度構成法(ALSCAL)、一般化ブロック・モデリングで分析した。一般化ブロック・モデリングでは、区切り値 0.07, 0.1, 0.13, 0.16 の 4 通りで非対称の隣接行列を作り、それぞれに関して、複数の関係のないクラスターに分かれると仮定した断片化モデル、中心的な分野があると仮定した中心化モデル、そして何の制約もつけないモデルの 3 種類を推定した。

3.2 雑誌論文中の方法の推移の分析

データには、1952--2008 年に出版された『社会学評論』と『ソシオロジ』に掲載された論文と研究ノートを用いた。書評、その他のエッセイはデータから除外する。上記 2 雑誌に偶数年に掲載された論文・研究ノートをすべてサンプリングして分析対象とした。サンプリングした論文は、著者名から性別を判断し（はっきり分からない場合は欠損値とした）、身分が明記されている場合は、身分コードを割り振り、方法も後述のコードを与えていった。身分や性別についてインターネットなどの情報からわかる場合は適宜参照した。共著の場合は、第 1 著者の身分と性別を用いている。共著はサンプリングした 1157 本の論文の中で 34 本（3%）だけなので、第 2 著者以降は無視しても差し支えないと考えられる。

身分は以下のうち、どれか１つに分類した。

- 専任教員:　専任講師, 助/准教授, 教授
- 学生
- 非専任教員: 非常勤講師, 助手・助教, 研究員, その他

各論文が用いている方法は、サンプリングした論文を実際に見て、以下のうちのどれか１つに分類した。

- 理論・学説: 主な検討対象が、社会学の文献以外にない研究
- 計量分析:　主な検討対象が、数量化されたデータである研究
- エスノグラフィー:　生活史・インタビュー・エスノグラフィー、エスノメソドロジー研究など、主な検討対象が、研究者が直接見聞して得た資料である研究
- 歴史・言説分析:　主な検討対象が、文書や図像、動画などである研究
- 数理:　主な検討対象が、数理モデルである研究

分類不能な場合は欠損値とした。事例研究とは、狭い意味ではエスノグラフィーのみを指すが、広い意味では、エスノグラフィーと歴

史・言説分析を指す。

４．研究成果

4.1 下位分野間ネットワーク

クラスター分析の結果は図 1、多次元尺度構成法の結果は図 2 のとおりである。図 1 のようにいくつかのクラスターに下位分野を分類することは可能である。しかし、図 2 が示すように、明確な裂け目や境界線は見当たらなかった。また図 2 では「文化・宗教」という分野が中心に近い位置にあるが、これは推定法を変えると変わってしまうので、あまり頑健な結果とは言えない。

さらに、クラスタリングとネットワーク構造を同時に明らかにするために、一般化ブロック・モデリングを行ったが、結果が煩雑なので、区切り値 0.13 の結果だけを示す。３つのモデルのフィッティングを示したのが図 3 である。図 3 を見ると制約のないモデルがもっとも誤差が小さいのがわかるが、注目すべきなのは断片化モデルよりは中心化モデルのほうが誤差が少ないという点である。つまり、日本の社会学における下位分野間の研究者の重なりを見る限り、複数の関係のないクラスターに断片化されているというよりは、中心的なクラスターによって統合されていると考えたほうが現実との齟齬が少ないということである。

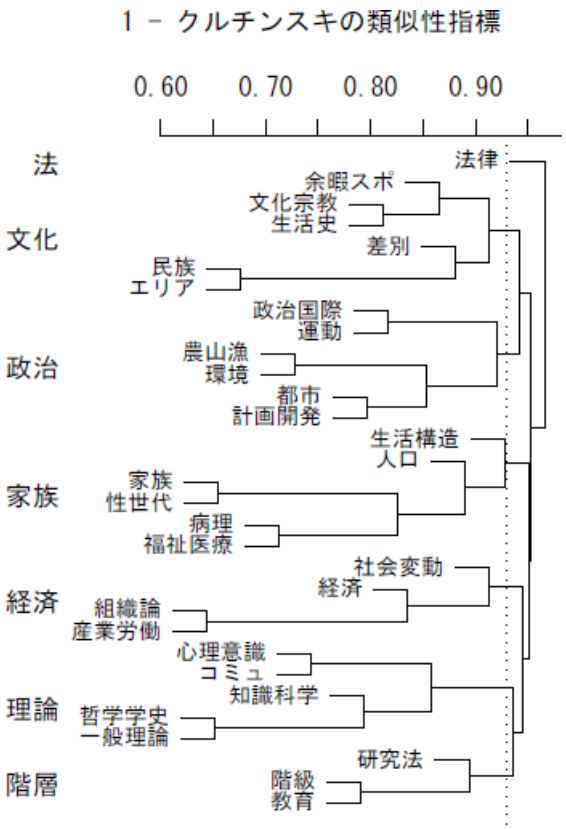

図 1 階層的クラスター分析（平均法）のデンドログラム

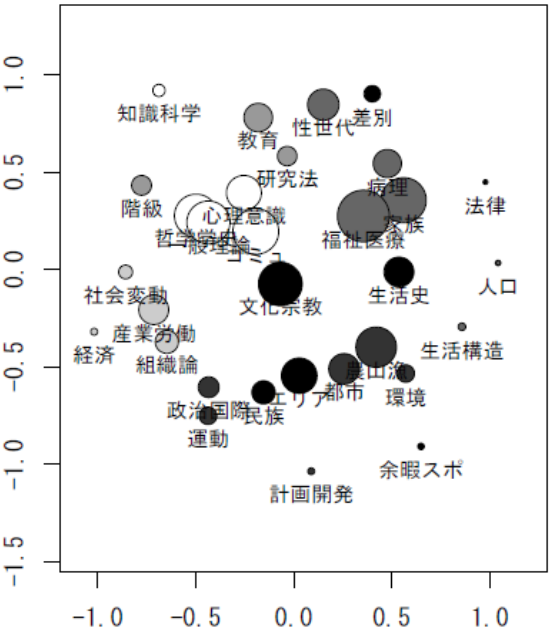

図 2 多次元尺度法の二次元解（円の大きさは研究者数、色はクラスターを示す）

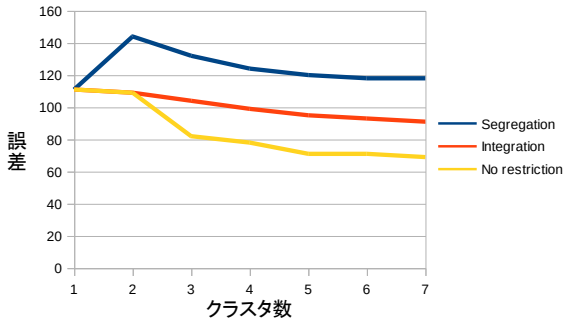

図 3 三つのモデルの誤差とクラスター数

表 1 制約なし 3 クラスター・モデルの結果

理論・文化	少数派	伝統
哲学学史 一般理論 都市 文化宗教 心理意識 コミュ	社会変動 組織論 階級 生活構造 政治国際 運動 人口 計画開発 研究法 経済 法律 民族 エリア 差別 性世代 知識科学 余暇スポ 環境	家族 農山漁 産業労働 教育 病理 福祉医療 生活史

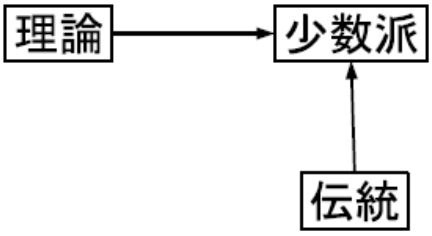

図 4 制約なし 3 クラスター・モデルの結果

制約をおかないモデルが最もあてはまりがよく、3 つよりもクラスター数を増やしても誤差の減少はわずかなので、3 クラスター・モデルの結果を示す。表 1 は各クラスターの要素を示しており、図 4 はクラスター間の関係を示している。クラスターの命名については検討の余地があるが、やはりクラスター間には何らかの関係があり、断片化が生じているとは考えにくい。このような結果は、クラスター数や区切り値を変えても同じで、断片化していない結果が常に得られた。

また、他の分野に強い影響を及ぼす中心的なクラスターは、制約をおかない場合には見出すことができず、中心的な分野の存在によって統合されているというよりも、様々な分野がゆるやかに繋がりあっていると考えられる。

4.2 雑誌論文中の方法の推移の分析結果

5 つの方法が用いられている比率をグラフで表したのが図 5 である。図 5 を見ると理論・学説が 1990 年以降減少傾向にあり、エスノグラフィーと歴史・言説分析が増加傾向にあることがわかる。計量分析と数理に関しては明確な変化は読み取れない。変化が起きたのはいずれも 1990 年代であることがわかる。

次に著者の性別・身分、雑誌の種類（社会学評論かソシオロジか）をコントロールしたうえで、方法論の年次による変化を検討するために多項ロジスティック回帰分析を行った。ただし、数理は数が著しく少ないので分析から除外し、理論学説を基準カテゴリとした。結果は表 2 のようになる。出版年と出版年二乗の効果を見ると、計量分析では有意な効果がないが、エスノグラフィと歴史・言説に関しては、出版年もその二乗も 0.1%水準で正の有意な結果がえられており、二次曲線的な増加が生じていることがわかる。このモデルから予測される各方法の比率をプロットしたのが図 6 である。図 6 を見ると、1980 年代にすでに実質的な変化の兆しがあったことが示唆される。ただし、二次曲線が変化のトレンドを正確にとらえているかどうかは（直線的変化及び三次曲線よりは当てはまりが良いのは確認済みだが）さらに検討が必要である。ただいずれにせよ、1990 年の前後あたりで、社会学で用いられる方法論は大きく変化し始めたと考えられる。

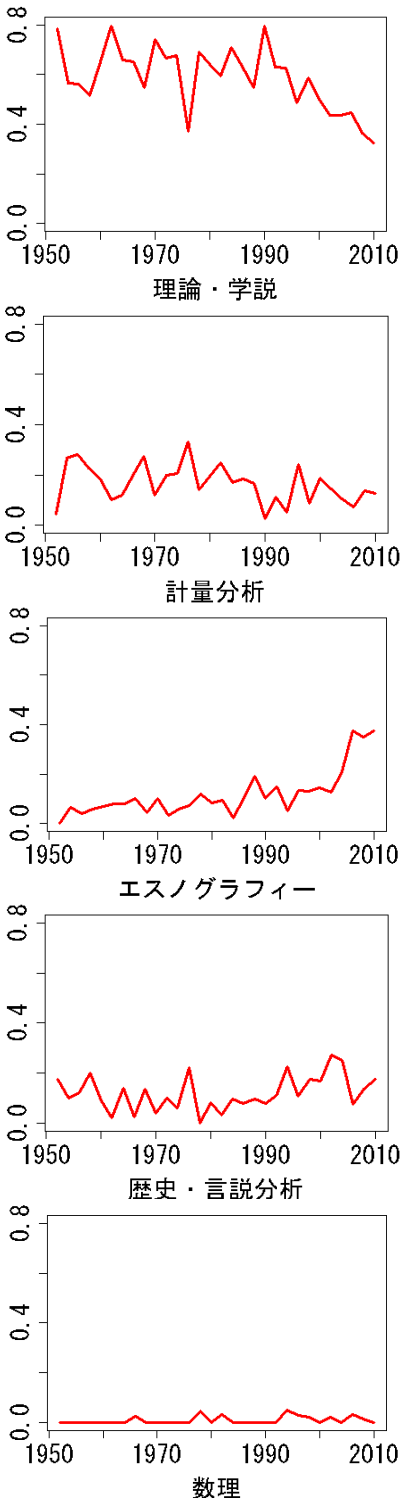

図 5 社会学評論とソシオロジで用いられた方法の割合

表 2 方法の多項ロジスティック回帰分析

	計量分析	エスノグラフィ	歴史・言説
切片	−.897**	−1.061***	−.969**
評論ダミー	0.42	−0.348	−.803***
特集ダミー	−.875**	−1.12**	−.986**
男性ダミー	−.865***	−.722**	−0.488
助手ほか	.766**	5.56	8.24
教授ほか	.567*	−0.184	−0.038
出版年	0.29	.492***	.231***
出版年二乗	0.23	.191***	.145***
尤離度	2023.4		

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

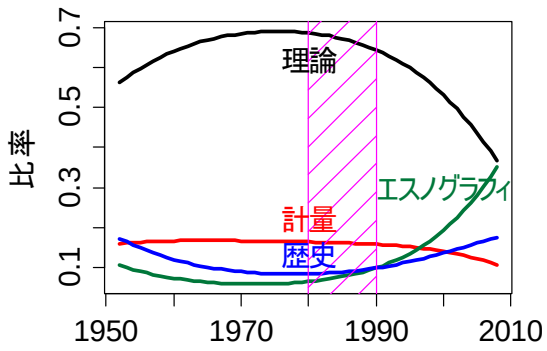

図 6 ロジスティック回帰分析からの予測

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①太郎丸 博，2010，「投稿論文の査読をめぐる不満とコンセンサスの不在」『ソシオロジ』査読なし、 54(3)： pp. 121-126, http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/126613 .

②太郎丸 博，2010，「数理社会学・リベラル・公共社会学: プロ社会学者は社会のために何が言えるのか?」『フォーラム現代社会学』査読なし 9: 52-59, http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/141985 .

〔学会発表〕（計 2 件）

①太郎丸博，2011，「日本社会学の専門分化と下位分野間ネットワーク」関西社会学会第 62 回大会（於甲南女子大学 5/29）.

②太郎丸博，2010，「日本社会学の専門分化と下位分野間の距離」第 50 回数理社会学会大会（於獨協大学 9/10）.

６．研究組織

(1)研究代表者

太郎丸 博 （TAROHMARU HIROSHI）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号： 60273570

(2)研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者

（ ）

研究者番号：